

「福生市立学校への期待や願い、実現したい学校の姿」について

委員名	期待や願い、実現したい学校の姿など	第1回検討委員会の感想
委 員	【期待（育てたい子ども）】 ○地域に愛着をもち、地域の発展に関わろうとする子ども ○自分から物事や人などに関わり、自分の力を発揮していこうとする子ども ○異なるバックグラウンド等、多様性を尊重する子ども 【実現したい学校】 ○地域の多様な人と関わることを通した地域学習の充実 ○一人一人が力を伸ばしていけるカリキュラムの構築 ○異年齢の子どもたちが触れ合う活動の充実 ○国際理解学習の充実、外国語教育の充実 【施設】 ○異年齢の子どもたちが集える十分なスペースがあること ○教室や廊下などゆったりとしたスペースがあること ○地域の方との交流が行えるコーナー（スペース）があること ○学びの拠点となるような学習センター的機能のスペースがあること	○福生市の今後の人口などの動態や計画について知ることができた。 ○魅力ある街づくりとして、子どもの学びの充実が必要であり、学校が魅力的になることが大切であると改めて感じた。
委 員	他地区の学校から福生に来た時に感じたのは、規模の小さい市だけど個性的な面をしっかりと持っている所だなということです。ICT分野や英語、特別支援学級に情緒があること、図書などが充実しているなど、行政などを中心に努力・工夫を重ねてきたのだろうと思えました。 しかし、実際の教育現場では、親は共働き世帯が多い、準要保護家庭の割合が多いなど、保護者が忙しい、時間に余裕がないなど、教育への関心格差が大きいと感じています。個別の問題や課題をもつ児童も多く、その対応も、教育現場では大変です。 施設面、環境面だけでなく、心の豊かさ、地域のネットワークなども必要な領域です。今後の検討会で話題にして欲しいなと思います。	プレゼンが、福生の実情を上手く説明していて、理解に役立った。校長の立場で、学校などの様子以外のこと、客観的に分かることは、本会の目的を推進する上で重要だと感じた。今後も、様々な視点でのデータや資料の提示があると、より効果的な検討委員会の話し合いが出来ると思います。ご準備等、大変だとは思いますが、宜しくお願いします。
委 員	○地域の核となる学校、子供たちや地域の方が愛着をもてる学校。 ○塾に行かなくても、基礎学力が確かに身に付く（社会的な弱者をつくらない）学校	○福生市が抱える短・中・長期的な課題を具体的に理解することができた。 ○人口減少については、少子化も課題であるが、学校経営の立場からすると、見守りや行事・学習支援をしてくれるCSやボランティアの方々の減少も心配である。小・中一貫（小学校の統合）を推進していくことで、これらも解決できる。 ○不登校の問題は、家庭や保護者自身の問題と関わっていることもある。市の関係機関との連携や支援も今後一層必要になる。 ○学校施設の複合化については、管理責任の所在を明らかにしていく必要がある。 ○学力については、学力未定着児童に対してじっくりと教え、補習する時間がなかなかとれない（工夫して取り組んではいるが）。また、学力未定着児童においては、家庭の教育力が十分でないこともある。学校だけでなく地域も受け皿となり、学力を付けさせていく必要も感じる（例えば、放課後子供教室に寺子屋的な意味合いをもたせるなど）。
委 員	○学校が保護者のみならず、地域の方々に強く支えられていることを、福生市に着任してから強く感じています。それだけに、保護者や地域の方々の期待に応える学校でなければならないと痛感しています。コミュニティ・スクールとして、保護者・地域の皆さんと共に、子どもたちの豊かな学びを実現していきたいと思います。 ○地域の拠点としての学校、地域の方も気兼ねなく来校でき、学校施設を利用できるなど、日常的に子どもたちと触れ合えるような姿が望ましいと思います。そのためにも、学校と公共施設が統合され、地域の拠点としての機能が果たせるようになることを期待しています。	○課題にしっかりと向き合い、早い段階から計画的に今後の学校教育の在り方を考える教育委員会の姿勢に感服いたしました。 ○こういう会を公開にしていること、そして、多くの傍聴者がいらっしゃることに、市民の皆様の教育に対する関心の高さと熱意を感じました。
委 員	○学力調査の結果と不登校の状況をみると学力の低いことが不登校にも結びついていると考えられる。 ○不登校が小3・小4で増えているのは、学力においていわゆる9才の壁、10才の壁が乗り越えられず、自己肯定感が下がり、意欲が低下していくと考えられる。 ○学習面において、低学年から個別に適切な指導・支援を行い、学力を身に付けさせることが大切であり、そのことで学力の向上、不登校の解消に結び付くと思います。 ○教員の授業力の向上、児童・生徒理解、特別支援教室の適切な実施が必要だと思いました。	○様々な意見、今後考えていかなければならないことが、わかりました。
委 員	学校、地域、保護者等がそれぞれの立場で感じている福生の子どもたちの課題を出し合い、共有するところから、初めて本当に目指すべき姿が明確になるだろうと考える。単なる理想論ではなく本音で語り合える場になることで、もしかすると新しい小中一貫像が生まれるかもしれない。 先日、中学校の体育大会を見て、子どもは間違いなく「つながっている」ことを実感した。あとは、我々がそれをしっかり認識した上で子どもたちに関わっていくことが重要だと思った。	
委 員	○子どもたちの成長を見守り支える大人が様々な角度の立ち位置にすることで、子ども自身が安心して助けを求められる（他者の力を信頼できる）ようでありたい。 →地域・保護者のつながりを、子ども（学校）を軸に作る必要がある時代だと感じる。 ○社会に出たときに、自分の力を発揮するためだったり困って迷っている時だったりに、望ましい方向へ進むための選択ができる力を育てたい。 ○子どもにとっての生き方、在り方のモデルとなる人との出会い、関わりが作れるとよい。	福生市の現在、そして予想される未来の状況を、よさと課題の両面で共通理解をすることができたのはよかったです。
委 員	○地域と一体となった学校 ○地域の拠点となる学校 ○地域の人々が誇りに思える学校 ○地域に活力を送れる学校	10年後、20年後の福生市と学校の姿について、具体的にイメージすることができたように感じます。 将来像をもって学校経営を行うことの大切さを学ぶことができました。

委員名	期待や願い、実現したい学校の姿など	第1回検討委員会の感想
委員	○小中連携から一貫という流れの中で、先行事例の課題とふまえ福生独自の一貫校の在り方が明らかになってくるとよいと思いました。 ○特に教職員のライフワークバランスについては配慮が必要かと思います。 ○CS の在り方とハコ物をからめて考えたいと思います。地域の方々が参画しやすい距離感を模索したいと思います。	○大変、有意義な会であったと思います。 ○教職員が今、どのような課題を感じているか、知りたいと思いました。（特に他校種の教員）
委員	【期待や願い】 ○CS の活動を通した地域と学校のウィン・ウィンの関係の構築 ○より充実した家庭への支援 【実現したい学校の姿】 ○生徒にとって安心・安全で認められ、楽しい体験ができる学校づくりにより、自尊感情や自己肯定感が高まること（福生の子はこれが大切だと思います。）	○様々な貴重なお話を聞くことができました。次回が楽しみです。本日はありがとうございました。
委員	【願い】 ふっさっ子が地域に対して愛着や誇りを感じながら成長して行くことを見守って行きたい。 【実現したい学校の姿】 町会・自治会の加入率低下により、残念ながら地域≠町会・自治会となっています。町会・自治会活動、CS 活動に携わる者として、学校においては地域と保護者の関係を前向きに捉え、お互いにとってより良い関係となるよう望みたい。	市内 10 校全ての小・中学校長が委員を務める委員会は大きな意義があります。今後の議論が福生の“教育の未来”に活かされることを強く願っています。もちろん微力ながら小職も一委員として議論に参加させていただきます。
委員	○人間形成の基礎を作る義務教育を途切れずに一貫して児童生徒の個々の可能性を確固たるものにする為に「小中一貫校」に賛成です。 ○その前提は、児童生徒にまなざしがむけられるべきものであり、小学生人口の減少、あるいは、学校施設の老朽化等の状況が前面に出てはならないと思います。 ○期待する小中一貫校としては、 ①児童生徒が、自らの人間力を培う場であること、ひとり一人の個性が花開く学校 ②保護者の方が、安心してお子さんの成長を見届けられる学校 ③家庭、地域、学校が、様々なチャネルで児童生徒の安全、安心の学校生活を担保できる学校 ④成長過程で出現する学力、体力、あるいは、人間関係などの課題を教職員以外の学校を取り巻く行政、地域、諸団体が一体となってケアできる学校支援	就学前の幼稚園、保育所の先生方からの御意見もお聞きできて、可能な限り、就学前から中学卒業までの母子手帳から継続する個人カルテの様なものがあり、いつでも相談できる体制づくりも大切ではないかと感じました。
委員	本委員会の末席に加えていただき、その重責に身の引き締まる思いです。力はありませんが一所懸命に頑張りますので、よろしくお願い申し上げます。 「子どもの教育環境を整えることが原点」とは正に至言です。これは、石田周教育長が検討委員会の冒頭で述べた言葉です。 第1回の委員会で、設置の目的や学校の現状と課題について、データを用いて分かり易く説明いただき感謝しています。 最大の「教育環境」は、「教師」と「学び舎」が考えられますが、本市に「コミュニティ・スクール委員会」が指定されたことも意味のあることかも知れません。 「個別最適な学び」とともに「協働的な学び」が、そうした在り方の検討の方途となることに期待するものと思います。 今年度の検討内容は「小中一貫教育の方向性」ですが、初めにありきではなく「何のため」という原点を見失うことなく、まず自分自身が自らを律していく決意でいます。 地域に住むひとりとして、大切な「ふっさっ子」の成長を見守っていきたいと思います。	
委員	○人口減少、コスト面からしても学校を含めた様々な公共施設が複合化、集約化されていくことは十分理解できます。そうすると、学校もどんどん開かれて風通しが良くなります。地域の大人たちが身近で学校教育の現場を見ることが出来るなど、メリットも多いと思います。 ○一方、20 年ほど前に起きた、大阪池田小事件を思い出すと、大変心配な部分もあります。合理化を進めるうえで、安全面をしっかりと考えた取り組みが必要と考えます。 ○遠い所から通わなくてはならない生徒のために、循環バス（福祉バス）の利用は考えられないでしょうか。公平・平等に利用対象者を決めるのは簡単ではないかと思いますが。	様々な立場の方々から、前向きな意見を聞いたことをありがたく思います。
委員	「誰一人取り残さない福生市の教育」という言葉に共感し、その方針のもと学びが止まることなく、子どもたちにとって、学校が楽しく充実した場であることを期待しています。 タブレット等の活用はコロナ禍で学びを止めない為にも、今後も必要性が高くなるのが想定されますが、やはり対面で人の目を見て、その場の空気を感じ、自分の言葉で自分の気持ちを話すということ、相手の気持ちを感じる力及び人との関わりも学校生活の中で学んでいってほしいと思っています。 タブレット等 I C T 機器の良い点も活かしながら、対面での人との関わりも大切にそのバランスを上手く取りながら、子どもたちにとって魅力的な勉強方法が展開し、すべての子どもたちにとって、意欲的に取り組める授業空間であることを期待します。 また、I C T 機器普及に伴い、タブレット等家庭での正しい使い方も今後、より課題になっていくとも感じています。 少子化、特別支援教育、外国籍の子どもたちへの教育、そして不登校対策等と様々な課題の中、ひとりひとりの状況を把握し寄り添っていくのも、とても大変なこととは思いますが、「誰一人取り残さない」という目指す言葉の通り、福生の子どもたちが皆笑顔で過ごせる地域社会であってほしいと願っています。	福生の子どもたちに関係する様々な立場の方々が集まる機会ということで色々なお話が聞け、貴重な経験をさせていただきました。今後、課題を一つ一つ議論し考えていくことが、子どもたちにとって、より良い教育につながっていくということを強く感じました。 卒園していく子どもたちが、どのような学校生活を過ごしているのか、また学校への接続に向けて情報交換等、子どもたちにとって、さらに良い方向になっていくことを今後も期待しています。
委員	市立学校の在り方検討委員会のお仲間に入れていただいていることにまず感謝です。 保育園としては、学校に入学するまでに基本的な生活習慣の自立と丈夫な身体づくりをして、学校は人として生きていく為に必要な事を勉強するところだということを伝えています。 勉強することが楽しいと思える授業を展開してくださることを望みます。 私自身が抱いていた学校のイメージは自身の通った小学校・中学校にあります。私は福生生まれ福生育ちで、四小が設立された当時入学し、二中が設立された時に入学いたしました。当時、団地ができ、急ピッチで二中が建設され、完全ではなく不十分でした。校庭もできあがっていない状況で、生徒は毎日石拾いをし、少しずつできあがっていくのが嬉しかったです。当時の担任の先生方も生徒に対し、厚い思いで接してくださり、とても有り難かったです。福生市の小・中学校で学んだことが自分自身のベースになっていると思います。	小・中学校の校長先生方の中に入れてさせて頂き、お話をうかがうことができましてとても有意義でありました。